

特集1

# Neo Contrast Enhancement CT

## ～そのアドバンテージを探ろう!～

### — 第8回 ECTISより —

## 序文

さいたま赤十字病院 放射線科部

寺澤和晶

造影CT検査は、血管や臓器の内部構造をコントラストの変化として高精度で可視化することができ、診断や治療に大きな貢献をしてきた。その勘所ともいえる造影CT技術は、日本では八町 淳らによって理論化され、医療現場において欠くことのできない分野の一つとなった。中でも、規定(設定)した注入(投与)時間によって再現性が担保され、比較診断における精度向上のポイントとしたこと、用法の最適化として循環血液量が体格に依存することを利用し、基準単位を体格に合わせて用量を調整する体重当たりヨード使用量(mgI/kg)としたことは現在でも根付いている。そして、近年ではマルチスライスCTの登場と劇的な発展により、検査目的や撮像部位ごとにヨード使用量をカスタマイズするといった注入方法や被検者の循環動態に応じて到達するタイミングを予測する細密なスキャン方法を組み合わせる技術が考案されるようになった。

一方で、造影剤は必須ともいえる検査薬であるが、過剰投与や過敏症反応などの副作用が起こる可能性があり、その対策が求められた。また、被検者の状態や病歴、造影剤の種類や量などによって使用方法に違いがあることから、それらを明確にするガイドラインが必要とされた。そのため、医療現場での安全性向上、適切な使用方法の確立を目的として、造影剤のガイドラインが作成され、周知されるようになった。これにより、診断に必要な最低限のヨード使用量で最高の診断能を得る造影法を構築すること、腎機能への影響にも考慮することが医療現場に浸透した。それ故、造影CT技術は、根拠に基づく評価から逸脱しない発想で新たな知見を探索することが不可欠ともいえる。

本特集では、5月末に御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターにて開催された「Neo Contrast Enhancement CT ～そのアドバンテージを探ろう!～」と題したクリニカルCT画像研究会・第8回 ECTISより、造影CT技術に造詣の深い先生方、研究成果や実践事例などの発表および最新のトピックスを紹介する。造影CT技術がメインであるが、しっかりとリサーチしていただき自身に反映いただければと思っている。また、大局的な視点から潜在能力を掘り起こす糸口になれば幸いである。そして、積極的・主体的に研究や探究を行う切っ掛けとなることを願っている。最後に、造影CT技術の進展によって、さらに正確で確かな診断が可能になることを期待し、本特集をお届けする。